

薩摩守忠度

林 天然

満れば缺くる理を

悟らで迷ふぞ浮世なる

月にわこがれ花に酔ひ

この世を我世と安らけく

榮華に誇りし一門も

運命こゝに盡さぬれば

なれし都を後に見て

西國さして落ちにけり

忠度卿はたゞ一人

狐川より引き還えし

人目を恐ぶ風情にて

五條の三位訪ひつ

若しも世亂の鎮りて

勅撰わらん其折りは

斯道の情義希くは

拙き詠歌も召しませと

鎧の下より取り出だす

調もやさしき歌百首

はるけき八重の汐路なる

千尋の底に沈むとも

ねかひ聞き入れ玉はらば

思ひ置くこと露なしと

再び向ふ西の空

指し行く先は驢なり

見よや天翔く蛟龍も

落つれば懦蚯となるぞかし

わはれ時めく英雄が

野邊に山邊に行き暮れて

木の^こ下^{した}かげを宿^{やど}として

花^{はな}や今宵^{こゝひ}の主^まぞと

うたふ心^{こゝろ}は優^{やさ}さしくも

今宵^{こゝひ}一^や夜^やの宿^{やど}からん

よすがは絶^たえて白波^{しらなみ}や

御影^{みかげ}大石^{おおいし}打^{うち}過^すぎて

猶^{なほ}も進^{すす}めば一^{たに}の谷^{たに}

孤城^{こじやう}落^{らく}日^{にち}支^しふ間^まも

鶴越^{ひよどり}の夜^よあらしに

頼^{たの}むこゝろもあだ櫻^{ざくら}

惜^をしや明日^{あす}を待^{まち}ちあえす

花^{はな}の姿^{すがた}はちりにけり

花^{はな}の姿^{すがた}はちりぬれど

ちとせもゝとせ後^{のち}の世^よの

文^{ぶん}讀^よむ人^{ひと}のためにとて

残^{のこ}せる形見^{かたみ}の一^{ひとえだ}枝^{えだ}は

千載^{せんざい}集^{しよ}にとといまりぬ

千載^{せんざい}集^{しよ}にとといまりぬ

保育者^{ほいくしや}のため

幼稚園^{ちゆういん}に於^おける自然^{しぜん}研究^{けんきゆう}(二)

平山^{ひらやま}ひさ

▼凡^{すべ}ての動物^{どうぶつ}は幼^{えうじ}兒^じに對^{たい}して親^{した}しい友^{とも}達^{たち}であるの
で、大^{だい}人^{にん}が見^みてさほどにない物^{もの}でも幼^{えうじ}兒^じは愛^{あい}らし
として近^{ちか}づくものである。それ^{それ}に大^{おとな}人^{ひと}は時^{とき}として
幼^{えうじ}兒^じが喜^{よろこ}んで友^{とも}として居^ゐる動^{どう}物^{ぶつ}を勝^か手^てに嫌^{きら}つて、
折^{せつ}角^{かく}動^{どう}物^{ぶつ}を愛^{あい}する心^{しん}情^{じやう}の萌^も芽^がを幼^{えうじ}兒^じから抜^ぬき去^さる
事^{こと}が多い。尤^{もつと}も毒^{どく}のある虫^{むし}を恐^{おそ}れさせるのは賢^{かしこ}い
事^{こと}なので、其^{その}時^{とき}には、そ^そういふ虫^{むし}は戸^と外^{そと}に置^おく方^{ほう}